

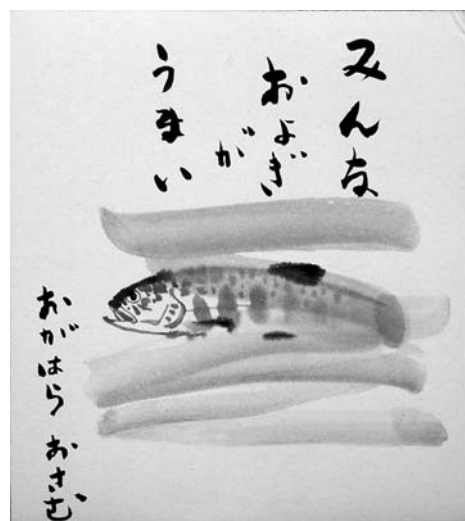
感動一点の場

『オショロコマ』(色紙)

年不詳 小川原 脩 画

包みを開けた瞬間、「ムムッ」と唸ってしまった。思わず笑みがこぼれ小川原のユーモアあふれる発想と、スラッと描き上げた筆の運びにいたく感動させられた。小川原の弟、理は「兄は時どき、おい、さとり、釣りに行くぞ、といって近くの川に連れて行ってくれた」「釣った魚はたいていがオショロコマだったような気がする、ある時、兄は見てろといって俣知安橋の欄干から尻別川にむかってジャックナイフ型のフォームで飛び込んだんだ。あれには驚いたね」と懐かしそうに話していたことを覚えている。

いつだったか小川原は「釣った魚はどうしている?」と、「たいていは食べます」と答えた。すかさず小川原、「オショロコマは少し焼いて干すといい出汁が出るんだよ」。別の色紙にはいかだ干しのように吊るされたオショロコマが描かれている。



ふるさと探訪

350回

あの時代 この時代

その35 『レルヒからスキーの町宣言へ』

明治45年4月～昭和47年12月



昨今、厳冬期から春にかけての冬山登山やスキー登山は決して珍しいことではありませんが、明治時代にはごく稀なことでした。

大正8年頃から北大スキー部や小樽商大スキー部が競うようにニセコ山系で合宿をするようになり、競うようにニセコの各山をスキーで征服してゆきました。彼らの練習を見た地元の人たちはこれはすごいものだと、手作りのスキーをはいて見よう見まねで斜面を滑るようになりました。大学のスキー部の発祥は、レルヒの指導を受けた若き将校たちで、将校たちが開いたスキー講習会の受講生によるものでした。

明治45年4月17日の羊蹄山スキー登山の張本人、レルヒ中佐によるスキー伝来100年、そしてスキーの町宣言40年目の本年12月までスキーにまつわるエピソードを紹介してまいります。

町長室から

春の訪れを感じる五月(さつき)、今月は田植えをする月であることから「早苗月(さなへつき)」と言っていたのが短くなり、さつきになったと言われています。

本町でも先月までは融雪剤で黒く染まっていた雪が農作地帯に広がっていましたが、所々で土が顔を出し始め、そろそろ本格的に農作業が行われることでしょう。農家の方々には事故などのないようお祈り申し上げます。

平成24年の開花予想では桜前線は平年より1週間ほど遅れてゆつくりと北上し、大型連休の後半には北海道に桜の便りが届くようです。今月10日頃には俣知安でも桜が見れると思いますので、散策などに出掛けてみてはいかがでしょうか。

雪解けにより空き缶やペットボトル等のごみが目に付きますが、町内各団体の皆さんが環境美化運動にご参加いただき、大変感謝しています。今後ともご協力をお願いいたします。

大型連休など車などで行楽に出掛ける機会が多くなると思いますが、くれぐれも交通事故には気をつけて、待ちわびた春を楽しんでください。

福島世二